

昭和三十四年七月二十五日發行 第三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第一六八号)

慈

光

第十五卷

第四号

次

則ち我善親友なり……………近角常観……………(1)

水の味……………高原憲……………(4)

父母のまします国……………西元宗助……………(7)

目

光を聞く生命……………菊地篁三郎……………(16)

「四聖諦」に聞く……………花田正夫……………(20)

則ち我善親友なり

近角常觀

他力の信心うるひとを
うやまいおおきによるこべば
すなわちわが親友ぞと
教主世尊はほめたまう
祖師聖人御正忌報恩講の時節に相成りました、実にあら
たかなる影向の梵筵が開かるる次第である。この時に於い
て、而も報恩講結願に、常に誦誦し奉るこの和讃を以て、
讚歎して頂くことは、実に尊き勝縁であると感謝いたし
ます。

この和讃は大經の東方偈に

聞法能不忘 見敬得大慶 則我善親友

とある意味を以て御製作なされたのである。

申すまでもなく、此第一句より第三・四句へ直に続く語
気である。そして第二句は一寸註をいれた様な口調になつ
てある。

他力の信心獲るひとを
すなはちわが親友ぞと
教主世尊はほめたまう。

を傍聴して思ひのままを飾気なく申さるるには

「私は人が何でも都合のよき時は御慈悲じやん」と喜び
悪い事をしたる時は、悪くても御たすけじやというて横着
して居らるる様に見えて仕方がない」

と申された。そこで私が直に申すするには

「それはあなたが仏様の御思召を悪くとも可いというこ
とに誤解して居らるるからである。親は子供が不具でもよ
いと言うものはあるまい。その如く仏は我等が悪くてもよ
いとと思召さぬ。されど不具に生れて来れば、親は一層哀
れ可哀想に思つて涙をしぼる。その如く不具なる我等罪惡
の子供のために遣る瀨なき大悲の胸を痛めさせらるるのが
本願じや」

と申したれば、忽ちにその人は涙をハラ／＼と落して申
さるるには

「アー私は大に間違つて居りました。たとえは片手なき
子を親が可愛がりたれば、他の片手をも断ちて一層親に可
愛がられようとはすまいかと申した様なものでありまし
た。勿体ないことを申しました。初めて親様の遣る瀨なき
御心を有り難く頂かして貰いました」

と即座に喜ばれました。

又四五日経つた後に、或婦人の方が家内の者と共に御法
の話をして居ります時に、家内のものが、このたとえを繰

敬いおおきに慶べば。

との意味である。勿論經文順序のままを和訳なされたも
ので、他力の信心を得て、敬い大に慶べば、ということな
れど、他力の信心うるひとを、と特に呼び上げられたので
言語が著しく強くだだける。従つて語が屈折して、敬い
大に慶べば、の句が如何にも亦著しく急所を押えた御言葉
である。

聞法能不忘、とは、聞其名号と同じであります。して見
ればうやまいおおきによるこべば、は信心歡喜でありま
す。聞法能不忘、聞というは『信卷』の御釈の如く

「聞くというは衆生仏願の生起本末を聞き、疑心ある
ことなし。これを聞と云う」

耳にきくことでなく、心に聞くのであります。遣る瀨な
き大悲の親心が聞こえたのである。親様の呼び声が、私共
子供の心に聞えたのである。親の親切が胸に届いたのであ
る。

前週の或朝、数人の求道者に御話をして居る処へ、或方
が、其兄なる方よりの、事附物トクモノを持参して下されて、其話

り返し申しましたれば、其人が俄にサツト顔色を変え、さ
てはとばかり驚きの様子でありました。なお私がお話し申
さんとて請じ入れた其時は落涙千行で、さて申さるるに
私に一寸耳の悪い子がありまして、その子のことを不憫と
思つて居ります。今同様に仏様が私を憫んで下さるか
と思えば御勿体ないことであります。ア、今迄、これ程の
ことが何故頂けなんだであろうと申された。これが即ち心
に親心が聞こえたのであります。

能不忘、というのは、能は『愚禿鈔』に不堪に対する也
疑心の人とあります。他人なれば不具なれば嫌い避ける
のである。愛し能わぬ、慈しみ能わぬ、しかるに大悲の親
心ばかり、我能く汝を護らんと仰せらるる。しかるに此の
親心を頂かずして、我の様不具は、たとい親でも嫌うで
あらうと思ふは疑心の人である。

しかるに親はその不具が一層不憫と思ふそよとの親心を
きくなり、コレハシタリ／＼と、今迄は、疑心、隔意、邪
推、孤独、無明の胸の中に、嗚呼この親様だにましまさば
と忽ち歡喜の心が起るのである。ここを『浄土論』には「
能く速に、功德の大宝海を満足せしむ」とも、善導大師は
「衆生の貪瞋煩惱中、能く清淨願往生心を生ず」とも申さ
れている。

一度かく頂いた已上は、金剛堅固で、憶念相續するゆえに、能不忘と申された。

見敬得大慶、聞きたというも、見たというも、つまりこの親様に遇いたてまつりた心持じや。特に敬の字は有難い。見神の実験を言われた綱島梁川という人は『正信偈』を読んで、獲信見敬大慶喜とある見敬の字を見て大いに渴仰せられた。竜樹菩薩の和讃に

恭敬の心に執持して弥陀の名号称すべし
と、同じく親心を頂くなり、何とも言えぬ、恭しく敬虔の心が起りて、往生一定とかねてさきに慶ぶのを、うやまいおおきによるこべば、と仰せられた。

かく親心を頂いて見れば我等は罪惡深重の不具者なれど特に親様の寵愛を受くる子にして下さる。さればこそ善導大師は、真仏弟子、と仰せられ、又妙好人とも仰せられた。それ故積尊も善親友じやと讃めて下さるのである。

『信巻』に極惡深重の衆生大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲る也と仰せられたも是である。かくて仏の子である、弟子である、友達である、して見れば聖人も、親鸞の弟子でない、御同朋じや、御同行じやとかしづきて仰せ下さるのである。

ここで一つ注意すべきは、動ともすれば、同朋というこ

とを、十方衆生は如来の光明の中に棲むゆえ皆同朋じやという様に言うものがある。成程、仏は十方衆生、皆たすけんと呼びかけたまえど、いよ／＼その親心の聞えぬ間は仏弟子と云うことは出来ぬ。親心をいたたかぬものは同朋とは言われぬ。

御一代開書にも、信心の上は四海の人、皆兄弟なりとも仰せられてある。それ故唯今も、他力の信心うるひとを、と仰せられたのである。その遣る瀬なき親心を頂かぬ已上は同朋とは言われぬ。兄弟とは言われぬ。同一念仏の御慈悲を頂きたる故、教主世尊は、親友と仰せられ、観音、勢至も勝友となりたまひ、弥勒に同じ、とも、聖人は、御同朋御同行とも仰せられる。

若しこの親心一つをいたたかなんたらば、蓮如上人の仰せの如く、永き世、開山聖人の御門徒たるべからず、である実に尊き御遠忌年の御正忌に遇いながら、此親心一ついただかなんたならば、何のためにもならぬ、遺憾千萬である。故に御同様に、この遣瀬なき親心を頂き、檀林宝坐より影向ましまして我等一人／＼を待ちかねたまう聖人の思召を深く頂かねばならぬ。

明治四十四年十一月。『蓮如』所載。

水の味の

人生曆

「今度はきつぱりと病状を打ち明けてもらいたい。」という前注文で往診を求められた泉青は、自動車を駆つてある村に病臥している彼を訪れました。

七、八年前のことです。彼は突然大咯血をしました。一年足らずの静養で回復した彼は、全治してしまつたと思ひ込んだのでしよう。再び仕事について思はず無理もしました。酒を飲む日も重なつて来ました。今まで彼の身中に眠つていた虫は、不養生でまたも目を覚まして勢づいて来ました。そして不意打ちに彼を襲いました。不覚をとつた彼は一時あわてましたが、間もなく平静にかえつて病床に就くことになりました。看護婦二人が附添つて療養につとめました。どうも今度は病勢が衰える様子も見えませんが、いづらか落着けなくなつて来たのでしうか。泉青から病状を率直に打ち明けてもらおうと決心したのです。

前の療養体験から考えて今度も七、八ヶ月、長くて一ヶ年の養生で、又回復出来るものと信じきつてゐるのも無理はありません。思うようにならぬのがこの娑婆の悲しさで

高原憲

す。両肺共に相当に犯され、その上、腸まで犯されていることは彼にとつての致命症でした。彼の脈をとりながら泉青は思はずひやりとしました。

致命症を、我身にかかえていようとは露知らぬ療養者は苦痛が迫つて来るまでは朗らかなものです。いろいろと闘病術を試みているうちに、やがては全快の島を見つけ出して、幸福の港にたどり着けようと一日一日の航海をあせつてゐるのです。おまけに甲板には羅針盤もないという始末です。

風のまにまに舵をとつて、先方に漂うている船のあとを追つています。我が船が漂流している恐ろしさには氣づく筈がありません。

「あなたはお幾つですか」

「三十八才です」

算盤に都合よくとりきめて人生五十とします。一万八千二百五十日あります。一万八千二百五十枚のカレンダーが出来るわけです。こうなるとどうやら心細いです。三十八才とすればあと十二年の残りです。カレンダーはあと四千

三百八十枚残っている計算です。益々心細い話です。だが療養者はこの人生暦の、残数を救えようとはいいたしません。万年暦をめくる気持です。何枚かめくつたら全快の日をめくり出そう。そのうちには「満願のよき日」をめくる時もあると、ただいたずらに人生暦の一枚一枚をもぎ取って行くのです。

この娑婆を去って行つた人達の使い残しの人生暦をそつと調べてみて、おどろくのは、この暦には「幸福の日」がつけ落してあるのです。娑婆の特製暦ですらそうです。並製の人生暦ときたら、めくる日もめくる日も雨の日です。風の日です。めくるまでは次の日を見ることを許されないのが人生暦のおたのしみです。

あと四千三百八十枚の暦、あと何枚めくつたら全快日、あと何枚目には幸福の日と、夢を追つて今日の一枚をいたずらにもぎ取る人は、今日一日の人生を失つているのです。

病める身の日拾う命かなと歌つた人がいます。「幸福の日」がつけ落してある人生暦の三枚目か、百枚目か、或いはもつとあとの方でか、きつとめくり出すのは「最後の日」です。四千三百八十枚と予算していても、出来の悪い人生暦の途中でできています。これがわかつていたら一日でも徒らにはもぎ取れません。

我が家

「私の病氣は治る見込みがありませんか。後のことも決めておかねばなりません。何年位もてましようか、はつきり聞かせて頂きたいです。覚悟は出来ていますので、何といわれてもビクともいたしません」

「ハアそうですか。誠に失礼な尋ね方ですが、この住宅は借家ですか、それとも……」

「まだ我が家を建てるまでに参加しておりません。病氣が私の私のことですから」

「借家ですか。では家主がたつた今立退いてくれといつて来たら、どうなさいますか」

「冗談じゃない。五ヶ年の契約で借りています。」

「いくら契約できめていても、家主がせつばつまればやりかねないことです。たつた今立退いてくれと来たときの対策は？」

「そんな無茶なことはありませんまい」

「そんな無茶なことが毎日起つているのです。あなたが何年位もてましようかという問題も、家の問題と同じです。まさか今日死神がやつて来ようなどという事は、ありはしないだろうと勝手に決めていられるから、悟つたような涼しいことがいえるのです。人生五十年。これがたいい人生契約です。だがこの家主は無常です。一度家主の

一日一日を頂かねばなりません。

何もかも我一人のためなりき
今日一日のいのちたふとし

私の人生暦は今日一日しかないのです。おそろしいことです。どうしてこの一日を頂こう。この一日の始末に過ぎ人の涙があります。ただ法を聞くのだと身命を賭して教えて下さいました。法を聞くことによつて、ただこの一日が無碍道への第一日目と展開して行くのです。

泉青が彼の病床を訪れて三日目の朝、電話のベルがけたたましく鳴るのです。長距離電話だと直感しました。心の中でひやりと感じました。泉青は電話口に立ちました。

「今朝から腹痛を訴えます。容体急変したようです。如何でしょうか」

「それはもう駄目でしよう」
「……………」

主治医から容体急変を告げられた彼は、今日一日の暦をあざやかに無碍道への第一歩を展開しました。彼の周囲の人達に残らず会いました。「これから遠き旅へ出るのだ」と言つて、念仏往生の本懐をとげたのです。

四千三百八十日残っている筈であつた彼の人生暦は、三日目で終りを告げていました。

御機嫌を損じたら、無情の風が吹きまくつて、たつた今立退かねばなりません。あわれというもおろかなりです。たつた今立退け！と死神がやつて来たら、どうなさいます？」

「……………」

「我が家のないものはルンペンです。立退き先がない。三界に迷う法界のルンペン、あわれというもおろかです。こうなると我が家をもつているものはどうでしょう。名残り惜しいことではあるが、住みなれし旧家を立ち退いてはじめて**真実の我が家**におちつのです。娑婆の家は一切借家です。縁ありて借りたこの家は、立退きの日まで大切に使わなくてはなりません。何はともあれ、我家をもつことが私共の最初の仕事であり、それが最後の仕事なのです」

「その我家と申しますと？」

「この我家は娑婆には建てられません。彼の土に用意されてあるのです」

「私はお恥しいながら我が家のことは忘れていました」

「御心配無用、間違いなく用意されています。そして真実の親様は、声をかぎりに呼びつづけていられます。我々は無眼人、無耳人であるが故に我が家が見えません。声が聞こえませんか」

「どうしたらいいでしょう？」

「聞法一路を辿っていると、きつと、ほのかに我が家に通ずる道が見えて来ます。お呼び声も聞こえて来ます。か

父母のまします国

西元 宗助

父を亡くしてから既に三十四年、母を亡くしてから早くも三年目の春を迎えた。いまは亡き父母のことを想う。父は世間的にはふしあわせであつた。ありあまる才能がありながら事業に悉く失敗し、殊に晩年は肺病をやみ、鹿児島海浜療養所で淋しくその生涯を閉じた。その前後のことを想うと堪らない。

いよいよ死期の近づいた早春のある朝のことであつた。そのころ、わたしはすでに旧制高校の卒業式をすませ、京大哲学科に進学することも確定していた。したがつて、父のことは非常に気がかりになりながらも、わたし自身は、鹿児島を去つて憧れの京都に遊学することで、頭は一杯であつた。それだけに、日課のように父の病室を訪れるわたしの気持は、軽薄であり、複雑であつた。いつたい、私は父の病氣を真に案じて病室を訪れているのであろうか。

すかながらも我が家に通ずる道を見出したもののみが、立ち退きの瞬間までおちついて働かせて頂くのです」

ひそかに父の死期のきたるのを待つような気持のまじつていることなども省みさせられて、わたしの足は重かつた。ところで、その朝である。病室に入つてみると、父は白い毛布で顔をおおつている。ハツと思つて、毛布をめくと、瘦せ衰えた父の顔は泪でぬれている。思はず私が、お父さん、どうしたんです、と問いかけると、「宗助、つらい」といつて泣かれた。

「どうせ、ワシは助からん。それにな、入院費はかさむお前の借金はふえる、病氣は苦しい。それで、はやく死にたいが、なかなか死ねん」といつて一息つき、さらに「じつは、昨晚は、首をつろうと思つたんや、ところが、首もつれん」といつて、すすり泣かれる。「自殺したら、わたしは楽やけど、あとに残るお前たちのことを思うと、それも出来ん。お父さんが自殺したということになつたら、お前

たちがどんな目にあうか、娘たちはさきさき嫁にもいけんわ」そして息もたえだえに「死ぬこともできん、そうかといつて、生きることもできん、宗助ワシはどうしたらよいか」といつて泣かれる。わたしは、なんといつて父を慰めたか、ともかく、お父さん、お父さんといながら、父の瘦せた冷たい手をにぎりしめて、一緒に泣いたことだけは覚えてる。そして父をおいて京都にいこうとする私、どうせ助からぬのであれば、お父さんはいつ死んでくれるのか知らんと思つてきた私、しかし、そのような私のために、どこまでも案じつづける父、わたしは自分の極悪が今さらながら、身に沁みて知らされた。

父はまた命脈をたもつていた。いよいよ京都にいかなければならなくなつた。その別れの挨拶に病室を訪れたとき「もう会えないかも知れない、それで、ひとこと、いつておくが、お母さんを大事にしてあげてくれ。たのむよ。じつはお母さんには苦勞ばかりかけた、やさしい言葉もかけてやらなんだ。宗助、たのむよ、お母さんのことをな」といわれた。

こうして愈々深夜、病室を去らねばならなくなつたとき「もうよい、お帰り。身体に気をつけて」といつて、目をとじられた。これが父の最後の言葉となつた。

お葬式はあわただしくすみ、しばらくは放心状態であつ

た。しかし、夢にうつつに、父の最後の言葉と、あの悲しげな痛ましい顔が目に残る。そして私はなんとという親不孝であろうかと責めつけられる。かの阿闍世は父頻婆娑羅王を殺した極悪無道の王子であるという。しかし、私はその阿闍世と異なるところがない。いや阿闍世は慚愧してゐる。しかし私は真に慚愧することもない。どうせ死ぬのであればお父さんは何時死んでくれるのか知らんと、あたかも死を催促するような気持をもつて看護していた私。死ぬこともできなければ生きてゐることも出来んといつて身悶えした父のことを思うと、いくらなんでも私はたまらなかつた。

このような悶々とした気持で京大文学部哲学科の学生になつていた当時の私、その私が、すがりついたのであるが、親鸞のお言葉であつた。すなわち「善人なおもて往生をとぐ、況んや悪人をや」であり、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし」とのお言葉であつた。しかし、ひそかに念仏を申してみても、孤独寂淋のうらさびしい感じは如何ともすることが出来なかつた。そして晩年の父の救われ難い苦悩の顔があらたに私に迫つてくるのであつた。かくして、わたしは真に救われる道を探めずにはおれなかつた。

ところで五月のある日、ある夜のこと、ある信仰ふかい

友人に右のような胸中の苦悶の一端をのべて、いかんともいたしがたい自己の罪濁を吐きだすように打明けているとき、そして、その友人から「そのままのお助け」と諭されたとき、突如として自己の罪濁ではなく、罪濁そのものの自己全体が投げ出されてしまつていた。しかし罪濁そのものの自己全体が、光明のうちに撰取されていることに気がされたのである。

今も覚えてはいるが、わたしは恍惚たる心持で、その深夜足音も軽く、下鴨の糺の森を歩いた。空を仰ぐと、満天の星がキラ／＼と輝き、天も地も、あたかも、六種に震動し感動しているようであつた。

しかし、わたしは、いつのまにか有頂天になつていた。すなわち親鸞聖人と同じ信境に到達したかのような自負。したがつて、この喜び、この信仰を、他に伝え、苦惱する人々を救ねばならぬという使命感が私を支配しはじめた。そしてまず、今は亡き父のことと、郷里にいる母のことに想いが及んだ。父は仏法を知らずして、人の世を憐れみ歎いて死んだのである。したがつて、父は浄土に往生しているとは思えない。じじつ夢に現に思い浮かぶ父の顔は淋しい。このことが私の問題になつた。そして漸く私を慰めたのは、歎異抄の「親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念仏もうしたること未だ候わず、その故は、一切の有情

は皆もて世々生々の父母兄弟なり、何れも／＼この順次に仏になりて助け候うべきなり」のお言葉であつた。しかしそうはいふものの何か落着けぬものがあつた。

さて、郷里の母に対しては、どうであつたか。わたしはさつそく手紙を認めて、自分がまことの信をえたということを書き送つた。夏休みに入るとただちに帰省し、母上も真剣に仏法を聴聞して、まことの信心を獲得せらるべきであることを説いた。そして、そのためには、とくに罪惡觀に徹底し、自己の有限性に絶對的にめざめなければならぬと、得々として弁じたのである。しかし、その効はなかつた。わたしが仏法を我が物顔に弁じたてれば弁じたるほど、母の顔は淋しくなるばかり。最後に私は、「お母さんは仏教信者のつもりでいられるけれど、すこしも信心はない。なにもわかつておられない」と責めたてて、母を泣かせ怒らせてしまふ結末に終つた。

わたくしは淋しい心持で、夏休みの終るのも待たないで京都に戻つてしまつた。そして、なにか、私自身に根本的な心得違いのあることが、仄かに感知せられるのであつた。しかしそれが、なんであるかはわからなかつた。

ここで母のことについて書かなければならぬ。母は鹿兒島でも有数の素封家の娘として、世俗的にいへば貴族院議員の娘として、それこそ日傘・乳母車で育つた。しかし父

のもとに嫁いでからは苦しい日々が続いたようである。性格も父とは対照的で、父が鋭敏で理知的であるのに対し、母はあまりにも情緒的内向的であつた。それに耳が遠く、殊に私どもが生れてから、母はひどい腸チブスに病んで、極端な健忘症となつた。そのために父は人知れぬ苦勞をしたが、母も母で悩み且つ苦しんだ。

わたしは今でも少年時代の悲しい想い出を覚えてはいる。それは、なにかのことで父にひどく叱責せられた母が、ふら／＼と家までついでつた。父にひそかに命ぜられて、わたしは母のあとを追つかけ、母のたもとをしつかり握つたまま、くらしい夜道を母につきまとうて、どこまでもあるいていつた。やがて鉄道線路の堤のところまで母はたちどまつた。子供心にも私はヒヤリとして「母ちゃん、帰ろう」と叫んで泣きじやくつた。母は私をだきしめて、そして、小さい声で南無阿弥陀仏と唱えた。

母は朝早く起きた。そして夜は一番遅くねた。暑い夏も寒い冬の日も、馬車馬のように働いた。その母にとつての唯一のよりどころは小さな、こわれかかつたお仏壇であり私たち五人の子供であつた。夜おそく、お灯明をあげて、蚊のなくような細い声で、すがるようにお念仏申して合掌する母の後姿は、子供心にも深くわたくしの身にやきついていた。

父はともすればヤケ酒をのんだ。ありあまる才能がありながら、しかも最高の学府を出ておりながら、うらぶれて郷里に帰つた父の晩年は、母にもまして可哀相であつた。さて父が亡くなつてから、母はいよいよ生活をきりつめていかなければならなかつた。幸いに、主として母方の親族のお蔭で、学費から生活費から悉く恵んでいただけだが、しかし、それでも、子供五人にたべさせるためには、母はいつも親族に気兼ねしながらひもじい思いをした。そしてなにかにつけて父の想い出話をした。柿のうれる頃ともなれば、お前のお父さんは柿がお好きであつたといひ、父のお命日ともなれば、必ず精進して魚肉をたつ母であつた。それだけに、両親の夫婦としての縁の深さと苦勞を、子としてあらためて思い知らされたのである。まことに、わたしの父と母は、われわれ五人の子供のために、夫婦となり、父となり母となつて、苦勞のかぎりをつくしたのであつた。

しかるに私はどうであるう、このように両親の限らない苦勞のお蔭で育ちながら、そして、そのお蔭で辛うじて実実の世界にめざめしめられながら、却つて現実の私はいつのまにか有頂天になり、あたかも自分の力で、ひとかどの人間になれたような、そのような深い錯覚と迷妄におちいつていたのであつた。

じつさい私は、所謂入信して宗教的に自覚し覚醒したと思つた瞬間から、じつは最も深い迷妄の世界、最も無自覚的な人間になつていた。そして、最も始末に困ることは、そのことに聊かも気がつかなくつたのである。したがつて又、最も傲慢な——宗教的謙抑を糺うだけ、それだけに最もたちの悪い傲慢な人間になつたのであるすなわち、あたかも自分は絶対的に自覚して真実の世界にありと思ひ、したがつて母は、世間の人は、無自覚な境界にありと見なしで見下すという、自縄自縛の惨たる人生がはじまつたのである。

ともあれ、私は母を苦しめた。父の遺言にもかかわらず母に対しても不孝のかぎりをつくすことになつた。ことに大学を卒業して間もなく、私は胸をやみ看護に心労する母に悉くつらくあたつた。同窓の友はそれぞれ職について輝かしく社会に巣立つていくのに、われはひとり病床にありと思つて、世を呪い人を嫉み、且つは恨んだ。この心情は我ながら浅ましいと思ひながらも、どうすることも出来ないで、ただ看護する耳の遠い母にあたり散らし、母を恨んだ。母を恨む自分をなさけないと思ひながらも、微熱のどるごとに、どうすることも出来ないで、ただ母を恨んだ。しかも母は、この苦しみに、じつと堪えた。

あるときであつた。母はあまりの辛さに、はげしく嗚咽おとろした。

そして、もう決してこんなことはしませんと誓つてみても私はやはり毎日おなじ陋劣なあやまちを繰返しました。しかし今となつて悟りました。自分のような、こういう人間には、鞭が、運命の鞭が必要ですよ」と、こういつて男泣きに泣くのであるが、この歎きは私も亦同じであつた。いな、私という人間は、たとえ万人に石打たれ、社会的に葬り去られようと、なお弁解して真に覚醒することがないのではあるまいか。げんに、以上のようなことがあつて、そのときは心から母にあやまり、心底から自己の人間性に棘然りげんとしたことは事実であるが、それも一時のことには過ぎなかつた。

また、あるとき、ドストエフスキーの著作を夜を徹してよんで悲泣し、一種の宗教的エキスタスの状態に陥つたがそれも一時のことであつた。ともかく、あれもこれも、一時のことにすぎない。そして、それを貫いてあるものは、永劫に暗から暗に流転して迷妄する、自己の存在だけであつた。しかし、そのことに真に気づかされるためには、まだまだ多くの人生の苦難が待ちかまえていた。私は宿業のままに果てしなき冥路の旅をつづける外はなかつた。

あしかけ五年間の俘虜生活から、やつと解き放たれて、舞鶴に着いたのは昭和二十四年の秋であつた。母や弟や、

した。そして私の枕辺に来て、「かんにんしておくれ、お母さんが悪かつた。お前の身体からだのことを、もつとよく気をつけてあげれば、こんなことにはならなかつたのに、わたしがいたらなかつたばかりに、お前をこんな辛い目にあわせて、それに、お前がお母さんを恨んでいると思うと、わたしは死にたい、宗助、かんにんして」といつて身悶えさせた。そしてダイヤの指環をだして、「嫁にくるとき持ってきたものは、もう何も無い、ただ、このダイヤだけが残つてゐる。このダイヤを売つて、お前の養生費に」といわれた瞬間、わたしは長夜の夢からさめた。わたしは、なんという人間であらう。これでも人間であるのであらうか。わたしは私という人間であることの怖ろしさ、罪のふかさ宿業におののいた。

わたしは真剣に浄土三部経や教行信証を拝読した。健康に関する書籍をも読んだ。そして、なんとかして立ちあがりたいたい願つた。

しかし、私という人間は、いくら反省してもザンゲしても、そして如何程改悛を誓ひ更生を願うても、そして一時いかほど覚悟し、感奮するとも、すべて、あるときにおける一時の精神的覚醒と興奮に終つて、そのあとは、却つて一層わるくなるのであつた。『カラマゾフの兄弟』のなかでドーミトリイは、「いくらザンゲしても改悛を誓つても、

満州から一足さきに引揚げた家内たちに迎えられる、奇蹟的な再会を喜びあつた。ただちに、私のための小宴がひらかれたが、年若い耳が一層遠くなつた母は、ただうれしそうに泣くむばかりであつた。

俘虜生活中、いろんな目にあひ、死に直面したことも二度三度あつたが、そのたびごとに、念頭に浮かんだのは母のことであつた。アルマ・アタでチブスに罹り、もう駄目かも知れんと思われたときも。

その母に今あえたのである。母は、じつと私の顔をみて、よかつた／＼というだけであつた。

わたしは文字通り新生活の第一歩を踏み出した。家財道具はすべて、満州に放置して帰つただけに、私ども夫婦は全く無一物から生活の設計をやり直さなければならなかつた。しかしそれでも、なにかもが嬉しく且つは有難かつた。私は生きてかえつたのである。

わたしは長い間、熱心な仏教徒であるという自負をもつてゐた。しかし、今やもう、そのような自負心をもつことも出来なくなつてゐた、わたしが仏教徒であるというのは仏教をきかなければならないほどに業の深い人間であるということであつた。小宴の席上で、「長いあいだ、みんなに苦勞をかけたな」といいながら、感慨切なるものがあつた。それは私の俘虜生活中、みんながわたしのことを案じ

てくれたこと、それから生れたばかりの子供を抱いて新京から引揚げた家内の苦勞や、また家内をいたわつてくれた弟妹たちへのさまざまな感謝の意味をこめた言葉であつたが、それはそれだけにとどまらなかつた。このような兄をもつた弟妹たちや、このような夫をもつた家内への、いささかのお詫びの意味も含まれていた。

あるときであつた、家内に「こんなボクによつて添うてよう辛抱して、よう待つていてくれたもんやな」というと、家内は色々な意味をこめて「スターリン様々ですわ」といつた。それからあるとき、「もう仏教信者の看板をおろしたから」というと、弟たちは、それを聞いて安心したというような顔をし、家内は苦笑した。じつさい、わたしの得意な仏教で、みんながどんなに迷惑したことであるうか。ことに家内が、あなたがお念仏申されると、それら、警戒警報があつてゐる。今日はお父さん低氣圧、とみんなで用心しました、という打明け話をしたときほど、私をかく然とさせたことはない。これは全く思いも及ばなかつたことであるだけに、私は長夜の懈慢のねむりからさめた思ひがした。そして、どれだけ、みんなに苦勞をかけた迷惑をかけてきたかを、あらためて思い知らされたことである。さて私は仏教信者の看板をおろして、そこにはじめて仄かなる自由の境涯をえた。わたしには青年時代のあるとき

あつた。仔牛がどこまでも親牛につきまとうように、如来は仔牛の如くに私につきまとうてましたのである。そして、ここにはじめて自由の境涯の一端にふれたのである。それは一切有碍に即する無碍の大道であつた。

母の晩年は幸にも概して静謐であつた。いよいよ老衰の床についたとき、そして、もはやあと旬日ももちがたいと医師にいわれたとき、母の枕辺に坐しながら、お母さん、というとき、母はニツコリとした。さらに母の皺だらけの掌を握りしめて、いろんな感慨と感謝の氣持で一杯になりながら、くもくじき、お父さんのところにいけますね」といふと、嬉しそうに、ほんとうに嬉しそうに、背かれるのであつた。人生の苦難に堪え、風雪を凌いできた母の顔は、磨かれたように美しく、腫も亦清く澄んでいた。母がこんなにも美しく、平和で無邪気であることが嬉しくもあり悲しくもあつた。しかし母はもう赤ん坊と同様であつた。そして、それから間もなくコンスイ状態に陥つていた。

ついに母は往生した。戒名は色々と思案したあげく、筆をとつて釈淨蓮と名づけた。弟たちのお蔭で、思いがけないほど立派な葬儀が営まれたが、あまりにも立派な告別式であり、沢山の会葬者がこられたので、ひと目、母にお見せしたかつたような、そのような感じがしたほどであつ

から一種の選民意識というか使命感があつて、ひそかに仏教の將來を一身に背負うてゐるような、そのような自負の念が絶えず働いてきた。そして仏教によつてのみ、全人類は救われるのであるとの漠然たる信念をもつてきた。しかるにこれらの野望とか志願は、私自身によつて悉く裏切られてきた。ことに満州時代からシベリアの俘虜生活時代にかけて、わたしはただ業火に燃えていつた。仏教を復興するどころではない、人類を救うどころではない。わたくし自身が真に救われていない。いな永遠に救われる可能性もない。その意味では人間という資格もない。最も反道徳的、反宗教的、反仏教的な自己であることを徹底して知らされた。じつさい、シベリア行の貨車のなかではク神も仏もあるものかと思つた。今も神も仏もなく、あるのはただ逆誘の死骸にほかならぬ自己の存在であつた。

ところが、逆誘の死骸が生きている。しかも念仏申して、生きてゐる。そのことに氣つかされた時の驚き。いわゆる幻のごとき想念の仏はなくなつたが、逆誘の死骸と共にあるもの、逆誘の死骸と一体となつて、逆誘の死骸を天地の根源から支えているもの、そして念仏となつて現われたまうものがましました。わたしというものが、どうなるうとこうなるうと、わたしの行履するところ、あたかも影の如く、このわたしにどこまでもつきまとうてましますものが

た。御導師のあとについて兄弟たちは念仏して合掌しつつそれぞれに母の生涯を思い、父のことを想つた。

さて翌三十六年の春休み、弟たちとも相談し、母の遺骨を抱え、家族を引きつれて久々に帰郷した。そして、それを機会に、父の三十三回忌や先祖の法要を営んだ。

郷里鹿兒島市の郊外にある草牟田の先祖のお墓、とくに父母のお墓の前に合掌して、感慨をあらたに且つ痛切にした。ところで子供たちも、それぞれ神妙に花を捧げて拜んでくれたが、そのとき、小学四年の次女が、とつせん、「おじいちゃんもおばあちゃんも、このお墓の下にいらつしやるの」ときく。それで私はウンと背いた。しかし、子供たちは、半分合点がいつたような、半分合点のいかないうような顔をしているので、思はず私は「お墓には、おじいちゃんやおばあちゃんのお骨が埋めてあるでしょう。だから、おじいちゃんもおばあちゃんもこのお墓にいらつしやるの。でも、おじいちゃんやおばあちゃんはお墓にいらつしやるの。でも、おじいちゃんやお母さんや、あんなたちは仏さまになられて、お父さんやお母さんや、あんなたちを守つていらつしやる」と答えながら、なんともいへぬ感にうたれた。そうだ、父も母も、私たちのためにさんざん苦勞して、そしてお浄土にかえつていかれたのである。そしてみ仏となられて、いまげんに、影の形にさうように、私の身につきまとうて夜風まもつていられるのであつた。

身体髪膚これを父母にうくというが、身体だけではない私というものの全体が父母によつてあり、父母によつて今現に生かされているのである。そして父母のお蔭でお念仏申す身にしていたらいてるのである。まことに父母の生涯の苦勞を想えば、そこに法蔵菩薩、兆載永劫の御苦勞の一端が偲ばれる。その意味において、法蔵菩薩とは大無量壽經に書いてある神話ではない。法蔵菩薩の御修行は、父母の苦勞、いな人類の苦難の歴史となつて、わが身にふりそそがれていたのである。そして、そのお蔭で漸く、逆諦の死骸であるこの身が、身も心も南無阿彌陀仏にならせていただくのである。わたくしは、あらためて両親のお墓の前にぬかずいた。

顧みれば、わが身のほども知らず、父を救おうとし、母を教化しようとした。しかし有態は、救われ難き存在は却つて私自身であつた。しかも、この救われ難き自己は、父母の辛苦のお蔭によつて、漸く救われる御縁にあつたのである。わたしは父母のうえに久遠のみ仏のいのちを感じる。そして、それと共に、父の臨終の苦惱にみちた面影が如來の大悲となつて我が身に徹してくるのであつた。

わたしもいつのまにか、亡き父の晩年の齡に近づいてきた。そして人生の旅路も漸く時にさしかかつたことを感ずるようになった。そして私自身も亦、いつかはこの世を去

光を聞く生命

(註) 筆者は明治卅八年に岩手県釜石市に生れ、二高から東大法科を卒業、判事として各地を歴任、宮城控訴院在職中、肝臓癌のため昭和二十五年十月逝去。二高時代から白井先生や阿刀田校長に導かれ、東大時代に近角先生の提擧をうけられた篤信の人であつた。

昭和廿四年に福島県下で強盗殺人犯者として検挙された三重県桑名市生れの鬼島和夫(廿四)の無期懲役の判決が仙台高裁で下されたが、その時菊地判事は陪席判事として立会つた。そして本人が罪の深きに泣きながらも生への執着に悩む告白を聞いた判事は、同じ厚信な弁護士佐藤氏と共に鬼島に救いの道を説いた。この書簡は、当時鬼島にあてられたものである。

菊地判事が最後の病床にあつて家族の者に代筆させて送つたものに、

「君の手紙を今見て病床に涙を流しました。君の立派な覚悟を聞いて実に嬉しい、必ず正しい信仰を固めて下さい。私は今生死の巖頭に立つており、お浄土に生れさせて頂くことに無限の感激にひたつています。君も私を思い

らねばならぬ日の来ることを覚悟せざるをえなくなつた。父の晩年の発病直前の日誌の一節に、「隣りの部屋から子供たちの笑い興ずる声がきこえてくる。だんらんのこの家庭の平和はいつまで続くことであろう。わが生のうちに死の蔭がすでにせまつてきている。嗚呼」とあつたが、この一節が想い出される。そして生死に即し、生死を超えてあるところの涅槃浄土のすでに用意せられてあることが仄かに想われる。しかも、その涅槃浄土は、ははの還りたまいし国であり、ちちのましますところの国であることが想われて、懐しくも有難くもあることである。

「念仏者の人生論」より。

父母のしきりに恋し雉子の声
ふるさとや臍の緒に泣く年の暮

芭蕉翁

ほろ／＼と鳴く山鳥の声きけば

父かとぞおもひ母かとぞ思う

行基菩薩

菊地 篁三郎

出す時があつたなら、その時その場でお念仏を唱えて下さい。私はそのお念仏の中に生きて必ず君に伝えるでしょう。南無阿彌陀仏……」
とある。宮城刑務所や仙台地検の特別のはからいで、葬儀の日、この無期刑囚の弔問が許された。とは当時の毎日と河北新聞に報道されている。

信仰書翰

鬼島君

君は私の手紙を意外に思われることと存じます。私は君の事件の控訴審の裁判に当つた裁判官の一人です。しかし私は今そういう関係を離れて君の友人としてここにペンをとります。どうぞそのおつもりで読んで下さい。

先ず私がどうしてここにペンを執る気になつたか、というところから書きましよう。君の控訴審の弁護士佐藤先生から、君が今、心から信仰を求めているということを聞きましました。佐藤先生に他力の仏慈の信仰を聴いているというこ

とを聞きました。私はそのことを聞いて、よそ事ならず感ぜられ、正しき信仰を頂ける日の一日も早かれと願わずにいられません。袖振り合うも多生の縁だとするならば、君と私との間柄も深い因縁に結ばれていることを思わざるを得ません。

私は君を善良なる青年だと考えております。しかも事ここに至つた原因はどこにあるだろうか。私は深い宿業のいたすところだと思わざるを得ません。私達が悪いと知りつつ悪いことをせざるを得ないところのもの、善いと思いつつ善いことの出来ないところのもの、それが宿業であります。毎日書の練習をつむことによつて能筆となります。能筆の人には悪筆にならうとしても、もうなれません。怠けて怠け癖のついたものは、勤勉にならねばならぬといくら決心してもなか／＼に勤勉に働くことは出来ません。それが宿業であります。この宿業は到底私共の生なかな決心で動かせるような生やさしいものではありません。しかしこの宿業に縛られていることは君も私も全く同じことで、ここに私の煩惱の姿を見せられるのです。

道徳堅固な高い修業に堪え得る人は、自分の力でこの宿業を打ち破つて全き悟りを開くことができるでしょう。少くとも釈迦はこうして悟りを開きました。しかし私共は日常生活の小さい悪すらもこれを改める力がないのです。わ

飽くまでも私を受け入れる大きな母の心を持つた人がいたならばどうであろう。私はその人の前にこそひれ伏し、その懐に抱かれて泣くであろう。その温い心こそ私の争い心、怒りの心をついに和けてくれるであろう。しかしそれは五分五分対等に争うている人間にはついに不可能である。

鬼島君——私に信仰を伝えて下さつた人（よき人・近角師）は、仏こそかようなひとなのだと教えてくれたのです。仏は人間が修行して絶対の悟りを開かれた方です。しかし煩惱の苦悩を経験したからこそ、煩惱のなやみに悩む者をあわれみ給うのです。煩惱宿業の身に争うのも無理がない、腹が立つのもつともだ、無理がないもつともだと哀れむからには飽くまでも見届け、救いとげようというのである。信じないものをばあわれみ給う、久遠の昔から仏の御心を伝えようとして御苦労していられるのである。そして御仏と私をつなぐものとしての念仏を下さつたのです。南無阿弥陀仏です。この念仏によつて救おうといわれるのです。南無阿弥陀仏は御仏の御心です。この御心を頂いて、私は御仏の懐に納められるのです。

私がかつて御念仏の教えを聞いたとき、信ぜられる者はよからうが、私は信ぜられない。有難いと思つて念仏が出来ない、と思つた。その時、近角先生は、こう話されたこ

れわれの煩惱ということは、決して今回の事件の様な事だけを言うのではありません。私達の毎日の生活を考えれば生活、悉くがそうであります。争い、ねたみ、そしり、怒る、こうして煩惱の業を深めてゆきます。思えば私の本来というものは何という暗黒な事でありましょう。私共はかくして生を終ることでしよう。しかし生を終ることによつてこの暗黒は解決するのであろうか。

私は強く生命の永遠なることを信じております。生命は不滅であります。

それは宿業という——その業の不滅なることから、即ち従つて生命（それは業のことに外ならぬ）は不滅であると説かれております。しかし生命の永遠なることを信ずることは却つて私の未来を一層暗くする。私の一生だけでなく私の死後永遠にこうした暗黒の宿業の続くのであろうか、私の根強い煩惱、争い、ねたみ、そしり、怒る、みにくい心、これをどうして無くすることが出来るであらうか。私の心はみにくくけがれている。私の力では一分一厘もの宿業を動かすことが出来ない。ただし私の争い、ねたみ、そしり、怒るのに対して、飽くまで争わず怒らず、私のみにくい心を受入れ、争わず、怒らず、柔和な心を持つて私を見つめ導く人があつたならばどうであらう。私の煩惱宿業を良く見透し、私の争い怒るのも無理はないと同情して

とを記憶している。

「お前が信ずれば救つてやろうというのではない。お前が唯一つの救いの道さえも信じ得ないのを憐むのである。信じられなくとも、信ずるまで見捨てず救いとげようというのである。お前は有難い念仏さえも有難いと思えない煩惱の子だ。それを憐れと思えばこそ、救おうというのである。有難いと思えなければこそなお不憫に思うから見捨てぬのである。……」

私はこれ聞いて驚いた。私の信ずるのを待つている仏ではない。信じない者を憫んで信じさせずにはおかない仏慈である。あゝ永劫の間私は仏に背いて御苦労をおかけ申して来たのである。勿体ないことだ。ありがたいことだ南無阿弥陀仏、々々々々。

ここに絶対他方の信仰がある。この信仰は、ただ念仏してたすけられまいらする信仰である。修行もいらぬ。善行もいらぬ。それは私の及ばぬことだからである。煩惱のまま、宿業のまま、念仏して御仏に帰するのである。この世の命の終るとき御仏の力で仏の悟りをひらき、仏となるのである。

鬼島君！共にこの念仏の信にたちかえつていこうではないか。この念仏によつて君が来世に御仏となる時、君の手に付れた人々を救う力が君に生れるのだ。この念仏の信を

頂くことこれが何よりも君の罪滅しになる。君が念仏によつて救われることはとりも直さずこの人々が救われることでもあります。深く省みてこの念仏の信に目ざめてほしい。君の今日を見て君をあわれみ給う御仏の御心をおもひ給え。君を獄中に置くことは、君にこの信仰を伝える御仏の方便かも知れない。私は心から君にこの信仰の届くことを祈り且つ信じている。

東条英機外七人の戦犯の刑死者も、最後はこの念仏の信仰に依つて心の安心を得て往生したという。東条さんも戦陣訓では安心を得られなかつた。ただ念仏することによって始めて御仏の御浄土に生れさせて頂くというところに安住したのです。

鬼島君！佐藤先生の御導きを御仏の救いの御手と信じてただ念仏せられよ。私はそのことを言いたいままにペンを採つたのです。

君にも仮出獄の道はある。いつの日にか又社会のために働くように、今は心静かに正しい確乎たる信仰を得られるように祈る。

君から出す手紙は回数が制限せられていと聞くので、私に對して御返事はいらぬ。一通でも身内の方々に手紙を出されるように祈る。

昭和二十四年八月二十九日。

四 聖 諦 に 聞 く

三、 滅 聖 諦

苦の集因を、内なる無明と渴愛の煩惱にありと徹見せられた釈尊は、その煩惱を滅するところに、苦からの解脱があると教えられるのであります。

さてこの「煩惱の滅」ということでありますが、それは煩惱を静観し、調伏し、統一すること、煩惱を無くしてしまつて木石になることではありません。良寛和尚の逸話に、

「病む時には病むがよろしく候。死ぬ時には死ぬがよろしく候」

と告げられたと聞きます。また、故甲斐和里子女史の歌に

岩もあり木の根もあれどさらさらと

とありますが、これらは渴愛の煩惱からの解放味でありませぬ。また、世間に、

幽霊の正体見たり枯尾花

と云うのは、無明の煩惱からの解放の味であります。

雀 の 唄

すずめ すずめ 今日もまた

暗い野道を ただひとり

森の向うの 藪かげの

淋しいお家へ 帰るのか

いえいえ 皆さん あそこには

ととさんも かかさんも 待つていて

たのしいお家もあります

今日は皆さん チユウチユウ チユウ



花 田 正 夫

煩惱がよくととのえられ、統一せられますと、心は静かでありませぬ。その静けさは、生命のない静ではなく、無限の動のまんまの静であります。独愛が全力をあげて廻転しているまんま、静止しているように見える、その状態にたとえられます。

釈尊は卅五歳の時、この滅を得られたのであります。そこに無明の煩惱は転じて無量の智慧の光明と輝き、渴愛の煩惱は転じて無量の慈悲の光明とあらわれ給うたのであります。

釈尊はその慧眼にうつる人界の姿を

「奇なる哉。奇なる哉。一切衆生は一大蓮華池の如し。

或花は未だ蕾かたくして水中に深く沈み、或花は水上に浮んで蕾をふくらまし、或花は水上高く出でて葳郁と芳香を放つている。」

と讚歎していられます。また、

「三界は我有なり。三界の衆生皆わが子なり」

とも告げられ。煩惱魔に駆使せられて、生死の苦海に迷い苦しむ衆生をみそなわし給うて、無限の慈悲があふれて

「衆生を愍念して、一子の如し」
「慈悲随逐して、犢子の如し」
とも申されています。

然し、華嚴経でこのさとり境界をとかれても、大衆には何が何だやら「聾の如く、啞の如く」であつたと伝えられます。それは境界の差であります。深い井戸に落ちこんだ者には、高く広い大空を見る由もありません。俳諧の妙を極めた芭蕉が、その紀行文には「見るものみな花にあらずということなし……」と述べて居りますが、それを知る人のすくないので

この道や行く人なしに秋の暮
と長歎息し、またナザレの聖者キリストが

「我笛吹けども、人おどらず」

と述懐したのも、他山の石として、このところを教えられます。釈尊はこの境界に到達する道を次にとかれようとして、「耳ある人の聞いて信を開くように、この不死の門は彼等に開かれたり」と大悟の沈黙を破られました。

四、道 聖諦

「道」のことを往還と云います。往くことも出来るが、還ることも出来るからであります。

先ず私共が、煩惱を滅尽した寂靜の境、一切の繫縛から

「道を聞く一日の生命は、道を聞かぬ百年の生命よりも長命である」

等々の教によつて、人界受生の真の目的が、聞法と求道にあると教えられます。

この道一筋に、進まれた聖者は、仏法二千五百年の歴史において無数に居られるのでありますが、九十年の御生涯を、「真実を顕す」一つに終始せられた親鸞聖人が

自力聖道の菩提心 心も言葉もおよばれず

常没流転の凡愚は いかでか發起せしむべき

と八十五をすぎられて述懐せられ、また、

「いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみ家ぞかし」

と告白せられたことは、何という怖いことでありました。また何という尊いことでありました。

一切の求道者は、聖人のこの表白の前に、微塵の妥協も許されず、唯うなだれてその真実さにくたれて慚愧の外はありません。

又中国の道緯禪師は

「聖道の証し難きことを決し、唯浄土の一門ありて通入すべき道」

解放せられた解脱の境、そうして無限の生命の躍動する大覚の岸に往く道として釈尊は中道を説かれたのであります。

「精進が余りに急激に過ぎれば心の調子は乱れ、緩慢に過ぎれば心は懈怠に流れる。琴の糸がゆるからず、強からずしてよき音が出るように」

と精進第一の弟子をいましめられたのも、不樂不苦の中道を教えられたのであります。この二つの傾向、即ち楽に執着して放縱に流れるか、賢善精進にかたよつて冷酷な律法主義に墮するかは、人類のあるところ何処でも何時でも繰り返される暗流であります。先ずこれを識められました。

次に、戒・定・慧の三学の修得を勧められるのであります。禁戒をまもつて、身と口と意との悪を防ぎ、そこにきよらかな禅定を得て身も心も靜かに澄みわたつて、自然に生じる智慧によつて、三界の虚妄の相を諦観して、大悟の域に到達する道であります。

さて「道」と聞くにつけ、私共の耳には

「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」

という、有名な孔子聖人の言葉が浮びます。仏道におきましては、施身聞偈の雪山童子の説話がすぐ想い出されます。又法句經の、

と教えられました。

是処に、道を往くことの閉ざされた者に、向うから還つて、迎えて下さる道がひらかれたのであります。

親鸞聖人はまたここに、

「煩惱具足のわれらはいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるをあわれみ給いて、願をおこし給う本意、悪人成仏のためなり」

と、よき人法然聖人に聞きとられたのであります。

私共も幸に聖人の御導きを蒙つて、常没常流転の身と知らしめられて「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらす身」とならせて頂きました。

ここに念仏に帰らせて頂いて四聖諦の教を仰ぎます時、聖諦、々とあります如く、それは私共に、觀念としては智的に知れましても、身につきません。飽くまでこれは聖者の道でありまして、その四つの鏡によつて照し出される私自身は、

苦聖諦をきいて、いよ／＼常樂我淨の四転到の身と知らされ、

集聖諦をきいて、苦の集因を外にばかりおいて、内にあると自覚出来ず、愚痴と瞋恚に終始する無智さが省みさせられ、

滅聖諦を聞いては、聾であり啞であつて、心も言葉も及びもつかぬ身を知らされます。

道聖諦をきいては、智目、行足を缺く身、過去、現在、未来に光の無いことが知らされますと共に、往の道は閉じて、還のめぐみに、如来廻向の本願念仏に帰らしめられるのであります。かくて閉ざされた道が如来の御手によつて自然にひらかれるのであります。こちらから叩いても、押ししても、びりつともしなかつた大門の扉が、向うから開かれたのであります。

この扉が向うからひらけるといふことは誠に有難いことでもあります。救いの光明は如来の本願から放たれるのであります。そして本願のひとり働きとして自然に成就せられるのであります。

石臼も心棒が二本あつては廻転しませぬ。如来と我と対立している間は、軸が二本ある石臼と同様であります。自分のよしあしに眼をかけず、ひとえに本願を聞く、そこに浄土の門が自然にひらかれるのであります。「たゞ念仏のみぞまこと」の信界がひらけるのであります。

五、むすび

馬鳴菩薩造の大乗起信論を読みますと、修行の段階が克明にとかれてありますが、その終りに近いところに次の一文があります。

〇 ていると思われれます。法然聖人はこの起信論を浄土傍明論として大切にされたことも思い合せられます。

このように、起信論や、易行品は、裏に表に念仏の大道を説かれてありますが、この四聖諦の慈訓も、その清浄にして曇りのなく、凹凸のない明鏡によつて、私共自身の転倒の相、虚妄の相、流転の相がそのままに照らし出されて仏智照鑑の広き深さに驚くと共に、その隅々まで満ち満ちる大悲のまことを仰がせて頂くことであります。

頼山陽を大喝して孝心に立ち帰らしめた、易行院法海師の歌に、無碍光を讃えられて

あきらけきひかりを四方のかぎりにて

月のうちなる武蔵野の原

とあり、更に、隅なき大悲を仰がれて、

武蔵野の チリ／＼草の露だにも

身をほそめてぞ 月は入りぬる

と詠じられました。ここに及んでは言葉が絶えるのであります。

「尽十方無碍光如来に帰命したてまつる。

無量寿如来に帰命したてまつる。

不可思議光に南無したてまつる。

阿弥陀仏に南無したてまつる。」

「衆生が初めてこの法を学んで正信を欲求めるのに、その心が怯弱で、娑婆界に住んでいて世事に追われて、常に諸仏に値うて親しくつかえ供養することも出来ぬことを畏れ懼れて、信心も退転するだろうとあやぶむ者のために、如来には勝れた方便があつて、信心を護りおさめて下さる。それは専ら念仏申せば、往生することが出来る。そして常に仏を見て永遠に悪道におちることはない。」

とあります。

この一文こそ千金萬金の重みのあるところでもあります。竜樹菩薩は易行品の中に、

「難行道を行じて久しくすれば不退転の位を得られましようが、その途中で種々の穿井があるとききます。どうが疾く不退転に達する易行の道はありませんか、と。

これに答えて、汝の言うところは、寧弱怯劣にして大心なし。これ丈夫の志ある者の言うことではない。」

ときびしく叱られてのちに、

「若し人はやく不退転地に至らうとおもうならば、

まさに恭敬心をもつて、執持して名号を称えよ」

と勧められ、而も菩薩御自らは、十二礼讃において、怯弱の身に同じられて、ひとえに念仏していられるのであります。こうした点から易行品は起信論と全く規を一つにされ

との聖人の表白、まことに尊い極みであります。

自分の詩

— 房州にて — 山村暮鳥

飯がすむとすぐ食卓は机になる

ぐずぐず茶碗をつついている子供らはせきたてられ

食卓は机にかわる

めしつぶだらけのそのうえには

あたらしい原稿用紙が延べられ

その上をペンが走る

時にはどうしてもペンの動かぬこともある

こうして自分の詩はかかれるのだ

また或る時には詩が書きあげられぬので

なかなか机は食卓とならず

家族が醋くお腹をすかすことさえある

こうして自分の詩はかかれるのだ

けれども見よ 今日という今日はその上に

善い友からの薔薇がうつくしく飾られている

こうして自分の詩はかかれるのだ

おゝこの深いいのちをこめて

ひとびとの手にかおり

しみじみとよまれる 拙い詩



あとがき

四月は、仏降誕の聖月であり、若い人には入学、卒業、就職と、希望に胸ふくらまして、新出発の月であります。ことに新調の制服姿を見るにつけ、その上に注がれた限りない慈愛の尊さに心打たれるものがあります。雨もよく 風もよけれど 鹿島立つ

今日の門出は 波静かなれ

○近角先生は、『宗教的罔朋』の中で「自分は精神的最大良友を得た」と随喜せられていますが、今度の先生の御講話もそれに通じる法味にあふれるものであります。

○「水の味」は、その中の二項を頂きました。医師として絶対信の上にあつての御診療の姿、まことに切々と迫るものがあります。只今は長崎市の是真会病院と、市外東長崎町の東望療養所をお兼ねになつて、病者の友として御活動下さっています。御健康を祈念してやみません。

○「父母のまします国」は、西元宗助様の最近御出版の、『念仏の人生論』から頂きました。仏法が身辺に深く潤うことの有難さ、襟を正さしめられますこととあります。京都市下京区堀川通り花屋町、百華苑出版。定価三三〇円也、振替、京都二五七八八番。

○「光を聞く生命」は故、菊地三郎様の著書のうち、終りの信仰書簡から頂きました。判事として働き盛りに亡くなられましたが、二高時代から白井先生に導かれ、東大の頃近角先生に聞法せられました。本書も百華苑出版で定価百八十円であります。求道録、聞光録の二項になつて居ります。序文は白井先生のお筆であります。阿刀田先生未亡人に、

老いませる恩師夫人と語らえば
ただありがたさに涙ぐみたり

と最後の病床で感謝していられます。又白井先生の御見舞法話の日に、

熱さがり 法話聴く身に 風涼し
とよこばれています。

○「四聖諦に聞く」の拙稿は、釈尊の常の仰せに傾聴申すところを述べました。御叱声を願います。

桑野 淳城

いとふかきみりをききて身もたまも
わずらいもなく かかる雲なし

業海のやみの彼方はなぎさかな
弥陀のみ船のかよいくるなり

くちはてしこの老木にしろたえの
法の花咲く 無碍のみひかり

四月十六日、
福岡市姪浜町 茂木病院気付

筆者の御住所
長崎市外東長崎町東望 高原 憲
京都市下鴨倉町六八 西元 宗助

御案内
毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一
道会例会。市電新郊通一丁目下車。
毎月廿四日、午前、午後。昭和区小坂町
教西寺。法話会・市電、御器所通下車。

定 価 一 部 二 十 五 円 (送 共)
半 年 百 五 十 円 (送 共)
一 年 三 百 円 (送 共)

編 集 ・ 発 行 人 花 田 正 夫
名 古 屋 市 南 区 駈 上 町 二 ノ 八 八
印 刷 人 本 田 政 雄
名 古 屋 市 南 区 駈 上 町 二 ノ 八 八
発 行 所 慈 光 社
振 替 口 座 名 古 屋 一 〇 四 七 〇 番